

(1) うそをつくことはいつどんなときでも悪いのかについて、一般的な倫理と技術者倫理の両面から考察せよ。

一般的な倫理からすると、ついてもいい嘘というものが存在する。お世辞を言うことも多少嘘が含まれることがあるかもしれないし、相手を傷つけないがために嘘を言うこともあるかもしれない。これは、善意の嘘とっていいだろう。例えば、末期がん患者に回復する見込みはないにも関わらず家族などが「まだ回復できる」という旨を伝えることを考えてみよう。このとき、嘘をつく側はつかれる側のためを思っているのであり、社会一般からすればむしろ共感できるものだろう。

もちろん、悪意のある嘘がいけないというのは言うまでもない。詐欺や悪徳商法など、重大な嘘になると刑事罰を与えられ、社会的に制裁を受ける。軽微な嘘であっても、続けるうちに友達をなくしたり社会的信用を失ったりすることになる。

いっぽう、技術者の倫理においては嘘をつくことは常に許されないものだといえる。技術者や研究者は通常客観的事実について述べるため、嘘をつくことは科学界からしてみればノイズ以外の何物でもない。また、嘘をつかれる対象が科学界全体または世界全体であるため、嘘をつくことが与える影響は大きい。(さきほどの日常における嘘の影響対象は、この技術者における嘘の影響対象に比べると格段に小さい。)

技術的な嘘というのは遅かれ早かれ追試をすることによってばれるものであるからそれほど悪いことではない、という主張もできないことはない。いくら嘘をついても、それへの反証が出てくることによって嘘であることがばれる、そして嘘をついた人は信用を失ってそれ以降相手にされなくなるという自浄作用が働くため、長期的にみた場合、科学界にとっては嘘をつく人が多少いても問題がないということもできる、という論理である。

しかしこの「長期」という期間に問題がある。ただ単に嘘の発表をした後に(ほかに何らの影響も与えずして)追試によって間違いであることが証明されたとしたら、嘘をついたことによる他への影響はほとんどない。追試をする人の手間が増えたというだけのことである。しかし、次にあげる例では発表された後反証されるまでに時間がかかったため、周囲へ大きく影響を与えることとなった。

1つ目の例は、講義でもとりあげられた話である。嘘のデータを用いて論文を書いたら賞を取ってしまい、記念講演までおこなってしまったというものである。講義を聴きにきた人などはみんなだまされたと感じることが想像でき、影響は大きいといえるだろう。

2つ目の例は、Lysenkoism（ルイセンコ主義）である。これは社会主義政権下のソビエト連邦において1934年に発表された、「後天的に獲得した性質は子孫に遺伝される」という誤った学説である。通常ならば誤った説であったとしても追試することにより反証可能であるが、「がんばれば報われる」という社会主義的な内容がソビエト当局に気に入られて党公認の学説となり、反対派（現在は正しいとされているメンデル遺伝学派）が次々と処罰されていったのである。また、ルイセンコ主義は自身に都合のいいデータだけを用いて実証されていったため、ソビエト連邦内ではその説が信じられ、主流となってしまった。この結果、ソビエトの農業は著しくダメージを受け、科学的にも多大な遅れをとるといふ大きな悪影響を残すこととなった。（この影響はソビエト連邦内だけでなく、日本などにもわたり、誤った農法が採用されるという事態にまで発展した。）

結局のところ、ルイセンコ主義のような例は極端であったにしても、このように技術者による嘘というのは大小さまざまに悪影響を及ぼすものであるということ間違いはない。「ばれるから嘘をついてもそれほど悪くない」とするのは無理があるだろう。社会のためにも自分のためにも、技術者というのは常に嘘をついてはならないと肝に銘じるべきなのである。

#### 参考文献

Carroll, Robert Todd. "Skeptic's Dictionary: Lysenkoism"  
(<http://www.genpaku.org/skepticj/lysenko.html>, 1998)